

エヌ・カ・クループスカヤの児童教育論

に関する覚書

—ピオネール組織の創設にかかわって—

長 江 好 道*

(1978年7月6日受理)

0 はじめに

ナジェジダ・コンスタンチーノヴナ・クループスカヤ (Надежда Константиновна Крупская, 1869-1939) は、ウラジーミル・イリイチ・ウリヤノフ (Владимир Ильич Ульянов, 1870-1924, ペンネーム, レーニン Ленин) の妻である。彼女はソビエト共産党 (ボ) の古い指導者・組織者であるのみならず、ソビエト教育の著名な組織者、すぐれた教育学者であり、ソビエト教育学の創始者のひとりにかぞえられるソビエト国民の英雄である。

この経歴が示すように彼女の教育論は、単なる講壇的教育論にとどまるものではなく、ロシアの厳しい教育現実¹⁾に深く根ざしており、国民教育の実際的課題の決定と深くかかわりあいながら構築されてきたものである。

青年の校外教育組織であるコムソモール (Российский коммунистический союз молодежи, РКСМ, 1919) は、Н.К.クループスカヤの手によって規約が起草され、組織された。また、子どもの新しい校外教育組織である若いピオネール (Юный пионер, 1922) も、彼女の理論的実践的に周到な準備の結果生まれたものである。

小論ではピオネール組織の創設の準備期ともいうべき1915年から1922年にかけて書かれたクループスカヤの児童教育論にかかわる主な論文を中心に分析し、子どもの発達にかかわるピオネール組織およびコムソモールの役割を彼女はどのように考えていたかについての見解を明らかにする。

1 児童教育論の構想とその準備過程

クループスカヤの生涯——それはプロレタリア革命の目的、社会主義建設の目的に向けられた闘争の生涯であった。彼女は労働者、農民の国家建設および社会主義社会の新しい人間の教育のために全精力を傾注し続けてきた。彼女はソビエトの国民教育の実践的課題の決定にあたって、社会主義社会の強化と発展とのかかわりで、教育の現実課題を理論的にも実践的にもそれらの意義を明らかにした。その意味で彼女の教育学的遺産は教育史および国民教育の実践の特殊または一般的領域を広汎に含むものである。

* 岩手大学教育学部

クループスカヤの児童教育論を検討するにあたり注目しなければならない彼女の労作はまず『国民教育と民主主義』⁹⁾ (1915年)である。これは教育史に関する最初のマルクス主義的研究であり、彼女が革命の接近と労働者階級への権力の移行の必然性を予知し、これに向けて「教育戦線」を準備する必要から彼女によって書かれたものである。彼女は、この労作で社会の各発展段階において労働教育の思想の内容が、この思想の実現を意図する社会階級の如何によって、いかに変わってきたかを示し、青少年の教育に関するマルクスとエンゲルスの見解を叙述したのである。

クループスカヤは、この著作において教育理論と学校の階級的性格の問題を明らかにし、社会主義社会の教育学と学校の独自性を理論的に証明した。彼女は社会主義建設という新しい条件の下で、子どもの校外組織の必要性および児童労働を学校外の教育としてどのように考えていくか、という点について『国民教育と民主主義』の第三版序文ではじめて明らかにした。

1920年12月、クループスカヤはその第三版序文で「労働学校を組織することは緊急な課題となり、学校は新しい勢力をひきつけ、つぎにそれ自身が〈現代社会を改造する道具〉⁹⁾」に変えていくことの必要性について強調しているのである。(傍点長江)

労働学校の建設を遅らせたものは他ならぬ戦争であった。ソビエト政権と国民は「これまですべての注意が戦争のことに集中⁴⁾」せねばならず、「戦争の停止⁵⁾」によって、ようやく文化・教育問題に注意を向けることができるようになったのである。『国民教育と民主主義』の本文と第三版序文にみられるクループスカヤ教育論の展開過程は「教育の根本原理を考え、これを実現する課題は、戦争か平和かという現代の歴史のもっとも重要なこともかかわっている⁶⁾」問題として、その序文の叙述内容は私たちに大きな示唆を与えるものである。クループスカヤは1920年の「戦争の停止」を児童組織創設の起点と考え、ピオネール組織の準備に入っていることが、その後の諸論文で明らかにされている。

彼女の児童教育論の根本原理は『国民教育と民主主義』の第三版序文が書かれる5年前にその本文でマルクス主義教育観に基づき、きわめて明快に語られている。そこでは「労働学校に関する問題の歴史を述べ、この思想の内容が、一般的な経済的条件に依存し、またどのような社会階級が労働学校の実現を試みたかに依存して、どのように変化したか⁷⁾」という視座から、彼女はつぎのような結論を引きだしている。すなわち「学校事業の組織が労働者大衆(労働者階級)の影響の範囲外にあるうちは、労働学校はかれの利益に敵対する道具になる。労働者大衆だけが、労働学校を〈現代社会を改造する道具〉となしうる⁸⁾」とのべ、ロシアの現実を周到に分析しながら労働者大衆とその子弟をソビエト政権の周りに組織する時期が到来したことについてのべている。

クループスカヤは労働学校建設の条件として「戦争の停止」をあげ、ロシアの歴史的教育現実の二つの側面を考慮に入れながら、労働学校の「酵母」として子どもたちを集団的に教育することの教育的意義を高く評価していた。それでは彼女の考える二つの側面とは何か。一つは、ロシアの文化・教育基盤である。「国民教育の分野には、他のいずれの分野にもまして、ロシアの経済的立ち遅れとその文化水準の低さとが反映⁹⁾」しており、農村は小生産の支配する環境であり、また都市は小ブルジョアの環境であること。他の一つは、その劣悪な環境を変革していく積極的な条件と労農大衆の力量であった。そこで彼女はそれらについて「混乱おさまり、飢饉がなくなり教師たちが面目を一新してくるにつれて、労働学校もまた改まり、その本来あるべき姿のもの¹⁰⁾」となっていく新しい条件を透徹した眼をもって分析しているのであ

る。

彼女の考えによれば、真に労働学校を建設するためには、まずこれらの環境を変革することであり、そのためにこそソビエト政権のまわりに大人から子どもにいたるまで、すべての国民大衆を組織して、労働学校の中にポリシェビキー的な新しい勢力をおくりこむことであった¹¹⁾。そして組織が教育の根本原理を一步も二歩も現実に近づける道であると考えたのである。グループスカヤは子どものすぐれた組織が労働学校を実現させるうえに大きな役割を与えるものとして、その活動に期待をかけている。当時の教師のおかれていた事情を深く分析し、教師たちの組織化への働きかけと同時に、教師の立派な助手、「学校の酵母」としての子どもによる若い社会主義建設者の組織問題は彼女にとって焦眉の課題の一つでもあった。

グループスカヤは児童教育論に関する多くの論文の中で、労働教育の実施を学校の活動のみにまかせてよいかどうかについて慎重に検討している。1915年彼女はすでに近代教育を築いた思想家たちから多くのことを学び、ロシアの教育現実に立脚して、古い教科主義の学校と労働学校との在り方の基本的なちがいについてのべている。彼女によれば労働学校の基本理念は、教育を生きた生活とたたき結びつけることであり、そのためには子どもを傍観的でなく、主体的に社会主義建設に参加させることによって、より成功裡にその目標を達成することができる、としている。

彼女は、古典的な近代教育の構築に貢献した思想家・教育者のひとりである J. J. ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712—1778) に学びながら、「肉体労働を社会的義務として、自由にして独立した人間になる手段として、広い知的視野と社会的諸関係の正確な理解をうる手段として¹²⁾」、労働教育の目標・内容・形態を学校教育に限定することなく、学校外の教育形態を新たに創りだすことの重要性について深く認識し、その組織の創設の方途を探究していくのである。彼女は労働教育を真に子どもの中に実現していくためには、学校と校外教育の有機的結合が必要であると考えている。子どもに対して単なる機械的労働ではなく、一定の目的に沿った労働、知性のはたらきを呼びおこす労働¹³⁾を施すことを意図している。

グループスカヤが『国民教育と民主主義』の中で労働と教育を結合させる教育論的意義について J. J. ルソーに学びながら「(1)それはいかなる職業への準備にもなり、(2)それが生徒の知的視野を拡大し、全体をつかみ、各部分の相互連関をたたく評価する可能性を生徒に与え、(3)それが労働を基礎とした社会的諸関係を評価するためのただしい基準を与え、(4)それが現存する社会秩序について真実の観念をうる可能性を与える¹⁴⁾」として、彼女はルソーのこれらの思想・教育理念が「150年経過し、まったく異なる社会状況にある現在でも、その意義は失っていない¹⁵⁾」とのべ、ロシア以外どこの国でも実現しえなかった近代教育の基本原則をロシアの現実に適用しようとする具体的、実践的企画にまで進めるのである。ピオネール組織はその労働学校を真に「新しい」学校にする上で不可欠な具体的、実践的課題を実現させるための新しい教育形態であると考えていた。

2 児童の集団化のための青年の教育

グループスカヤは新政権樹立の年である1917年、論文『労働青年をいかに組織するか?』の中でロシア労働青年同盟規約の草案¹⁶⁾を書いている。この規約の理念はのちに制定される1919年綱領およびコムソモールの規約に殆んどが継承されていく。彼女は学校風でないもう一つの

青少年の教育組織の創設を意図しており、その基本原理の課題を明らかにしながら、1919年コムソモール創設の準備過程で大きな役割をはたしている。

彼女は子どもの「学校風」でない教育組織をつくるにあたって重視したことは、子どもを指導する教師以外の成人や青年労働者、農民の再教育であった。子どもの社会活動、自主的学習を発展させるにあたって、『労働青年をいかに組織するか?』の中でつぎのようにのべている。「未成年者たちは成人労働者の支援がある場合にだけこの闘争をおこなうことができるのであり、¹⁷⁾」(傍点長江)その条件を欠いては子どもの校外組織を十分に発展させ得ないと考えているのである。

クループスカヤはソビエト政権樹立の時から、ロシア教育人民委員部の委員でもあり、校外教育の政府委員をもつとめている。彼女は青年や子どもの教育に深い注意を払うとともに、成人の文盲、半文盲清算事業を強力に推進しているのは、その事業が経済建設に必要なばかりではなく、子どもの文化・教育建設に不可欠な事業であると考えていたからである¹⁸⁾。彼女は成人や青年の教育普及をピオネール組織建設を土台として考えていたのである。事実、革命後ソビエト政権は1921年までに400万人¹⁹⁾にのぼる成人の文盲清算の実績をあげ、またピオネール組織の創設時には、コムソモールに46万人²⁰⁾にのぼる青年を結集させていることである。

ア・ヴェ・ルナチャルスキー(Анатолий Васильевич Луначарский, 1875—1933)によれば「クループスカヤは、教育活動にいつも最大の愛着をもっていたが、このことは、大衆のもっとも広汎な共産主義的啓蒙に奉仕するという意味において、²¹⁾反動的なツァーリの文部省「警察的捜査、青年にたいする愚弄、人民の知識欲にたいする侮辱の省²²⁾」とはきわだった対照をなすところの教育政策をとりつづけてきた「教育人民委員部の魂²³⁾」的存在であった。このように彼女の信念を支えてきたものは一体何であろうか。その著作の中に示された活動から推量できるもの、それは彼女の人民大衆の創造力に対する信頼と人民大衆との直接的結びつきに他ならない。

また青年に対して、クループスカヤは、大人の援助を必要と考えつつ「他方では、成人労働者はかれら(青年)の支持を必要とするのであるから、未成年者たちは自分たちの被選出者を職長会議に派遣し、労働組合に加盟し、自分たちの経済状態の改善のための闘争に、一般的に言えば、成人労働者と手をたずさえて進まねばならない²⁴⁾」とする学び方と学ぶための組織の在り方についてのべている。彼女の見解は、大人であれ、子どもであれ、ツァーリズムにたいして武装した人々の子や孫が、新しい社会では知識でもって武装し、現実を建設する有能な手で、呪われた過去の遺物を相手に闘争できる人間の育成に資することにあった。

クループスカヤは、革命後とりわけ青年の組織化の上で「独習の組織化²⁵⁾」に注意を向けている。これら青年の組織が子どもの校外教育組織をつくりあげるのである。「戦争の停止」後のロシアの教育事情は「必要なだけの学校建設の予算を組むことはふさわしくなく²⁶⁾」、青年の「独習に関する問題は、長期にわたって、第一に重要な問題であり、本質からいって大多数の青年たちにとっての知識を習得する基本手段²⁷⁾」とされねばならない、そのような現実が青年たちを待ちうけていたからである。

クループスカヤの1922年ロシア・コムソモール第5回全ロシア大会政治教育部会における報告『青年の独習』は、コムソモール自身の学習にとっても、またピオネール組織を広汎に組織していく意味でも特別な意義を持つ内容であった。この報告は、1920年10月4日、ロシア・コムソモール第3回大会でレーニンが行った演説『青年同盟の任務』の教育の基本原理を実践的

に示した内容であり、レーニンの演説の思想と密接なつながりをもつものである。彼女の考えによれば、青年の独習のための基本的手段は、図書を利用する能力（傍点長江）を高めることであるとしている。当時のロシアでは青年や子どもの「独習を援助する組織²⁸⁾」や「参考書や教科書²⁹⁾」が殆んどなかった。そのような教育事情の中で、レーニンの教育の基本原理を実現していくためには、「独習の組織化が必要であり、国家機関が独習しようと望むものに援助を与えるようにする³⁰⁾」ための国家的保障が必要であった。彼女は青年にたいして「人類がつくりだしたすべての豊富な知識で自分の意識をゆたかにする³¹⁾」ための方途を示したのである。

彼女はじつに注意深く青年に読書のしかた、書物にたいする態度、図書の選び方、見学のしかたとその意義、メモのとり方、朝から学習することの心理学、生理学的意義、時間の使い方、勉強のための好ましい条件のつくり方、作業のシステム化による効用、作業の配分、参考書・辞書の扱い方等³²⁾について青年に教えている。同時に彼女がのべていることは県政治教育局、郡政治教育局の事業として青年の独習の問題を位置づけ「この問題に二倍の注意をむけ³³⁾」、かつ「この事業ができるだけよく組織化されなければならないということに注意をうながし³⁴⁾」ていることである。

ロシアの労働青年はよりよい未来のための自覚的闘士となるためにできるだけ多くの知識が必要とされた。それを獲得する不可欠の条件として青年には「組織化する能力・技能」のすぐれた教育形態が必要であった。グループスカヤはコムソモールが自己教育のためのすべてのサークル、クラブおよび読書室などを青年の自治を土台にしてつくるように配慮し、青年にたいして自主活動力のひろい発達の機会を提供することの重要性について実際の具体的な見解を示している。

グループスカヤはレーニンの文化革命の理論に深く根ざして青年や子どもの教育組織および学校建設に具体的な方向性を与えている。そして「戦争の停止」期から新経済政策（НЭП）期にかけて、彼女は教育の分野において、レーニンのいう一定の前提をまず革命的方法で獲得することからはじめ、そのあとで労農政権とソビエト制度をもとにして、他の国民に追いつくための前進という、手だてを講じた。青少年教育の分野で、ピオネール組織の創設の意義は、まさに「革命的方法」による教育方法であり、その形態として位置づけられたのである。

3 ブルジョア的教育遺産の批判的摂取とその創造

グループスカヤがピオネール組織創設の4カ月前の1922年1月、コムソモールにあてた論文『ロシア・コムソモールとボーイ・スカウト運動』は、彼女の児童組織論として注目すべき論文である。コムソモールがじかに子どもたちに接して教育することの歴史的意義と同時に、ブルジョア的教育遺産から徹底的に学ぶべきことを青年たちに教えている論文である。青年にとって子どもに社会主義の何をどう教えるかの道筋は、まさに未踏の分野であり、グループスカヤはきわめて精緻にその意義と方法を示している。彼女はコムソモール・青年にたいして、子どもを組織することの意義、子どもの見方、組織能力を高めることなどについて、青年にわかり易いことばでのべている。

青年がこれから着手しようとする未来の小さな社会主義建設者の教育の意義について言及しグループスカヤは「コムソモールはわたしたちの子どもや少年少女をその影響下に入れ、かれらが組織するのを助け、かれらをすぐれた、しっかりした後継者に育てあげるといふ仕事³⁵⁾」

なのだとして、青年の肩に社会主義建設事業の偉大な部分を委任しているのである。また、青年にたいする大きな尊敬の念をもって要求を提起しているのである。つぎに彼女の子どもに対する尊敬の念も大きく、子どもの見方についてのべている。「少年少女たちはもう赤ちゃんではないこと、かれらは周囲のすべてにたいするするどい関心をもってしていること、ひじょうに大きな率先性もち、肉体労働も、知的労働もやりたがっていること³⁶⁾」について彼女は、従来の古いロシアの子ども観とは無縁の児童観を青年に教えている。

コムソモールが、ただちに会得しなければならない能力は、一体何なのであろうか。彼女によれば、それは子どもたちの「率先性を組織することを学ばねばならないし、仲よく行動することを子どもたちに教えたり、必要な知識を身につけるのを助けたり、社会的活動をおこなうことを教え、知的労働の分野でも、肉体労働の分野でも組織的に働くことを教えなければならない³⁷⁾」そのようなものであり、彼女はコムソモールが子どもを立派に組織できる能力を高めることに注意を払っている。

クループスカヤはボーイ・スカウト運動の諸方法を創造的に摂取するにあたり、ポリシェビズムの精髓を決して忘れてはいない。その実際活動は「青年の訓育の事業にひろく適用されるべき方法³⁸⁾」であるとしながら、肝心なのは「共産主義の目的を実現するために適用³⁹⁾」すべきであることを強調するのである。

1922年クループスカヤの論文『ピオネール運動の前進のために』では、階級闘争の激化に伴って「子どもの魂を守る闘争」が学校建設の上でも、階級闘争に勝利するためにも重要な課題であることについてのべている。「戦争の影響で階級闘争が尖鋭化してきたこの数年、子どもの魂を守る闘争も尖鋭化して⁴⁰⁾」ゆき、この時期、ボーイ・スカウト運動中ブルジョアの少年運動の典型として、世界中にひろまり、また、ファンストの組織であるイタリアの少年組織「バリイルラ」などがロシアの国内にも、多くの資本主義国家群の子どもにも影響を与えていることを彼女は指摘している。しかし一方では、労働者によって支えられた少年団も資本主義国に創りだされた。たとえば、クララ・ツェトキンら(K. Zetkin, 1857—1923)の指導でドイツには「戦闘的」な少年団など、また青年コミンテルンなども存在を指摘している。ピオネール運動は、まさにこのような世界的な階級闘争の激化する状況の中で早急に子どもの組織をつくることの必要から発展していくのである。

クループスカヤはさらに『ピオネール運動の前進のために』で明らかにしたことは、ピオネール運動が労働者の組織、とくに婦人労働者との結合を深める必要の問題である。自覚した婦人労働者が、まだ自覚が十分でない婦人労働者や農村婦人にたいして「若いピオネール」にたいする関心とその意義を理解させるための教育と宣伝の必要を強調していることである。彼女はこの婦人たちに教育、宣伝をするための内容と方法をあみだし子どもと婦人の文化問題をピオネール運動の中で追求しようとする姿勢を示している。当時ロシアの子どもは6年もの長い戦争と内乱の中で悲惨な境遇にたたされてきた。多数の戦争孤児やひどい生活環境の下で生きる子ども、肉親をもたないで母親の愛を必要とする子どもが多数いた。このような子どもたちに対して婦人労働者たちは自分の子どものように接することが要求されていたからである。

クループスカヤは、1922年、ピオネール運動の展望をつぎのように語っている。「われわれロシアでも少年運動が発展しはじめた。この運動に参加している11歳から14歳までの子どもたちは『若いピオネール』と命名されている。彼らといっしょに活動しているのはほとんど例外なくコムソモール員たちである。ソ連邦では国家が労働者と農民の手中にある。ブルジョア諸

国では、国家権力が完全にブルジョアジーの観点にたち、子どもの共産主義運動を妨害するためにあらゆる努力をしているとするなら、わが国ではまさに正反対である。わが国の強大な共産党とコムソモールは、児童運動の発展を障害なく、ひろく援助することができる。教育人民委員部とその他すべてのソビエト組織は、子どもたちを援助している。その運動のために、ひろい可能性がひらかれているのである⁴¹⁾」とのべ、彼女は革命後わずか5年にして、ソビエト権力のまわりに子どもの大軍を結集して行くための具体的展望をつくりあげたのである。

4 ピオネール組織と総合技術教育

子どもの知的発達と生産労働との結合が、子どもの全面発達にとって不可避的な要件であるとする見解は、近代教育を築いてきたヨーロッパの思想家・教育家たちによって幾度となく提唱されてきた。たとえば、ジェー・ジェー・ルソー (J.J. Rousseau, 1712—1778)、ジェ・エッチ・ペスタロッチ (J.H. Pestalozzi, 1746—1827)、エイ・エル・ラヴォアジエ (A.L. Lavoisier, 1743—1794)、アール・オーエン (R. Owen, 1771—1858)、エフ・エム・フーリエ (F.M. Fourier, 1772—1835) らがそれである。しかし、教育政策のレベルで、それらの思想を実現させることができたのは、ソビエト政権下のロシアがはじめてである。

1919年3月、ロシア共産党(ボ)第8回大会は、同党綱領を採択し、その中で総合技術教育⁴²⁾に関してつぎのように定めている。「——ポリテフニズム的教育〔総合技術教育〕(生産のすべての主要部門のことを理論と実際において知らせる教育)を実施すること。」(傍点長江)という綱領の内容の実現は、また「戦争の停止」を待たねばならなかった。総合技術教育の思想の「真正な養育者」は、ソビエト政権であり、ロシアの民衆であった。

総合技術教育を実現するためにはあまりにも多難な現実をクループスカヤは、1922年論文『初等学校の任務』でつぎのようにのべている。「『われわれの学校は労働的でなくてはならぬ』と宣言されているが、すでに5年を経た今日に至っても、まだ労働学校は生まれていない。ところでわれわれのいう労働学校とはどういうものであろうか？ それは『労働愛を養う学校でもなく、一面的機械的な労働の学校でもなく、自助的行動の学校でもない。』、そんなものは『ニセ労働学校』である。われわれのいう労働は、学校生活の構成部分としての労働であって、『人民の労働行為の全面的学習が、学校プログラムの基礎をなすものである。われわれはしばしば、総合技術教育を多面的技能と解釈しているが、それは誤りである。技能は手工業的形態においてではなく、最も完成されたすべての形態において、学習されなくてはならない』⁴³⁾」と、当時の労働学校の実態に触れ、「人民の労働行為の全面的学習」を学校という形態だけにまかせておくべきか否かの基本問題に触れている。

彼女は子どもに「生産のすべての主要部門」について「理論と実際において知らせる」(傍点長江)ための教育が必然的に校外教育の諸形態を必要とすることを明らかにし、学校と校外教育組織の有機的結合を図ることを通じて、子どもに「人民の労働行為の全面的学習」をはじめて保障することができると考えているのである。

1922年、ピオネール組織の創設にあたり、クループスカヤは総合技術教育における理論と実際を結合するための歴史的社会的条件を精緻に分析し、真の労働学校を建設するために、もう一つの「学校」であるピオネール組織という新しい教育組織の創設にとりかかったのである。

1920年5月までには校外教育関係者の数は約32万人⁴⁴⁾に達し、コムソモール数48万人⁴⁵⁾、そ

れに大量の文盲・半文盲清算を終え、子どもを組織する条件を創出したのである。1920年の終わりごろには、十月社会主義革命にたいする「干渉戦争の基本的勢力は壊滅させられてしまう」という情勢の中で、クループスカヤは『労働的総合技術教育的の学校と生産的プロパガンダについて⁴⁶⁾』というテーゼを書いている。このテーゼに書きこまれたレーニンの「覚え書」(1920年9月26—27日)は、ソビエトの学校建設のうで重要な位置を占めている。レーニンの覚え書によれば、学校が可能な限り生産労働の「実際」と結合すべき条件をつくり出すことの必要性について力説し、もしそれがなければ「ブチブル的な手工業の学校」から一歩も抜けでることができないことについて語っている。クループスカヤのテーゼに対して、レーニンは力説したところは「総合技術的教育への即刻の移行、あるいは、ヨリ正確に言えば、総合技術的教育への現在できうる限りでの一連の前進の即刻の実現を提起することが、無条件的な課題である。(傍点レーニン)⁴⁷⁾」として、子どもの教育が生産と結びつけられねばならないこと、「実際」的教育であらねばならないこと、「科学の基本」の教授がなされねばならないことなどについてそこに示されている。

このようにクループスカヤとレーニンは新経済政策に着手する前年の1920年、「戦争の停止」を目前にして、教育の問題の社会主義的な実現にむけて奥深い検討を重ねていたことがわかる。とりわけ、子どもの教育に関していうならば、まず「子どもの魂」を守ること、「古い教科主義の学校」から子どもを解放すること、集団的な雰囲気の中で教育することなどについて深く考えていた。すなわち「新しい人間——共同して生活し労働することができ、自分のことをみんなと切りはなさない共産主義者、明晰な頭と情熱的な心と器用な手と高度に発達した内的規律をもった人間⁴⁸⁾」を育てることの具体的方途を探究している。

1920年代のはじめ労働学校は「口頭総合技術的教育」(傍点長江)といわれるほど、「労働の匂いすらなかった」といわれている。この学校に本当の総合技術教育を導入するためには、子どもの校外教育組織の樹立を待たねばならなかった。この意味からもピオネール組織は、「総合技術的教育への即刻の移行」の実現に向けられた「新しい」子どもの教育組織なのである。かつて、クループスカヤはピオネールを称して「学校の酵母」と命名したが、それは上にのべてきた理由から、そう呼ばれたものであろう。すでにのべてきたが、彼女は子どもの知的発達にかかわって労働教育の意義を高く評価しており、普通教育と労働教育との緊密な結合の理論と実践の筋道を探究し、かつ、その政策化への道を模索している。彼女によれば総合技術教育は社会的政治的課題にも応えるべき性質のものであり、単に教育学だけの問題としての範囲にとどめることを許さなかった。とりわけ社会主義建設途上の国においては、総合技術教育が普通教育の一構成部分に据えられなければならないとされている。何故ならば総合技術教育は物理・化学、数学、母語、地理など、いわゆる「科学の基本」と称される教科に貫ぬかれ、普通教育科目の構成に深くかかわるべき性質の内容であるからである。

総合技術教育自体の質を高めるために「教科目間の相互の結合、それとの実践活動との結合、とくに労働教授との結合が必要である。そのような結合のみが労働教授に総合技術的性格を付与しうる⁴⁹⁾」ものとしている。また、そのことによって子どもに肉体労働を尊敬する心を育成していくものである。クループスカヤは教育と生産労働の結合を子どものあらゆる生活の中に導入し、あらゆる機会に子どもが自主的に知識、技術・技能およびポリシェビズムの精神を会得することを子どもに期待し、かつ、それを保障する教育目標・方法・形態について理論化し、かつ具体化している。

5 むすび

子どもの集団を組織するためには子ども一人ひとりがなにをなしうるか、誰が何に、より優れているかを知る必要があることについてクループスカヤはこうのべている。「ある者は話が上手にできるし、ある者は絵が上手に描くことができるなど、だから真に集団的な労働となるように各人の間に労働を分配することについて教えてやらねばならない⁵⁰⁾。」と。彼女はピオネール活動がさまざまな、そして美しさ、明るさをもった方法、形態によって運営されるべきであることについて言及している。子どもたちはその活動を通じて、かれら自身の自主性、積極性、創意性を発揮させうる目標、方法、形態をとり入れるべきであることについてのべている。そしてピオネール活動が何よりも子どもの心をひきつけ、興味をおこさせ、視野を広げるように組織することの重要性についてのべている。

ピオネール組織がロシア的規模で統一される前夜ともいわれる1920—1921年にかけて、ソ連邦共産党(ボ)中央委員会は教育活動と党組織のすべての活動とを緊密に結合すべきことが強調されている。とりわけ党中央委員会は子どもを組織することが、社会主義建設事業にとってすぐれて重要な施策であることについてのべている。そしてこれらの施策のありとあらゆるものを下部党機関の審議に付し、労働者大衆、とりわけ青年や婦人の創意と積極性を喚起し、ピオネール組織の運動に参加することを呼びかけている。

クループスカヤは、児童論を古典的な近代教育の思想と方法に学びながら、ロシアの現実に学びながら、校外教育を預かる教育学者として、また教育組織者として、ピオネール運動の準備と育成のためにその行政手腕を発揮した。とりわけこの運動の推進を指導する中央機関としての教育人民委員部の役割についてつぎのようにのべ、その率先性と民主性について注意を喚起している。すなわち、教育人民委員部は、(1)全体的な方向づけを与えること——とくに、地方機関は、地域や企業の特長性を考慮に入れて実際の計画を作成すること⁵¹⁾。(2)審議には労働者大衆を引き入れること。(3)政治教育部は労働者大衆の要求をよく知り、今なにが市民・大衆の注意をひきつけているかを知ること。彼女はこの三つの条件が子どもの校外教育を支え、発展させる基礎的な条件である、としている。中央機関の本質的任務は法令や教授要目をおろすばかりでなく、大きなことでも小さなことでも下部組織を援助することが必要であることについて彼女はとくに注意を払っていることである。

クループスカヤは「ピオネールの母」といわれている。このような理論的実践的準備を経てピオネール組織は1922年5月19日、コムソモールの手によってモスクワを中心とする4,000人の子どもを組織することからはじめられたのである。1923年には7万5,000人、1924年には17万人、1925年には156万人の子どもたちが、このピオネール組織に加入するのである。今日では学童の殆んどが加入しておりその数2,500万人である。イ.ア.カイロフ(И. А. Каиров)は今日のソビエト学校を評価するうえで、ピオネール組織の教育史上に果たした役割をぬきにして評価することができない⁵²⁾とのべているが、このことはその組織を創設するにあたって貢献したクループスカヤの理論的実践的役割をぬきにして語ることはできない。

〔注〕

1) この時期帝国主義戦争と国内戦は、ロシアの国民に恐いほどまでに損害を与え、国民経済の失速状況をつくりだした。およそ6年間にわたる戦争状態で、ロシアの学校事業もまた困難な事態におこまれた。学校という学校はどれも使いものにならないほど破壊されていた。

教師や子どもが使う教科書や教材・教具類は極端に欠乏していた。とくに戦場となった地方の学校は一層ひどい状況に見舞われ、また多くの地方で教師の飢餓状態が発生するなど革命直後のロシアの学校は戦争の傷跡が容易に癒されなかった。

農村では戦争による国土の荒廃に加えて、凶作、飼料不足、家畜の病疫などによる家畜頭数の激減にみられるように、農村経済は異常な危機に襲われた。一方、都市においては労働者の食料事情が悪化したばかりか、原料資源の不足によって農村同様に危機におこまれた。ツァーリによって徹底的に文盲化されていた圧倒的多数の国民は戦災と天災の二重苦によって、窮乏、破滅、疲労、消耗という極度に苦しい生活状態を招く結果となり、生産意欲の減退、小ブルジョアのイデオロギー発生危機が生まれそうな状態になっていた。

1920年には巨大産業の規模は、1913年の約7分の1に縮小して、最も大きな破壊をうけたのは冶金工業と材料製作工業で、銑鉄の精練高は戦前の水準のわずか2.4%に激減するとともに、数百の工場、炭鉱、鉱山、油田などが破壊された。

- 2) Н.К.クルーブスカヤは、この著作の意図について論文集『レーニンについて』（邦訳、高橋勝之、新日本出版社、（下）p.103）で明らかにしている。すなわち「世界大戦が勃発したとき、レーニンは人類の歴史における大きな歴史的変革のあることを予見して、青少年のことを考えながら、教育の問題に注意をむけている。グラナト百科辞典のためにかいた論文『カール・マルクス』のなかの『社会主義』の節で、かれは生産労働と授業との統一にふれたマルクスの文章を引用している。当時、レーニンは、工業の発展した先進諸国で授業と生産労働との統一の方向でなにがなされつつあるかについて本を書くことを私にすすめた。そして私は『国民教育と民主主義』という本を書きあげた。かれは注意深く読んで、その出版のために奔走しはじめた」とのべている。尚、この論文が初版本として出版されたのは1917年である。
- 3) Под. Н.К. Гончарова, И.А. Каирова., Н.А. Константинова., Н.К. Крупская, Педагогические сочинения, т. 1. изд. АПН РСФСР, 1960, с. 253.
- 4) Под. Н.К. Гончарова и др., Н.К. Крупская—Педагогические сочинения, т. 1. с.253.
- 5) Там же, с.253.
- 6) Клубскаヤ, 五十嵐頭他訳, 「国民教育と民主主義」, 明治図書, 1976年, p.160.
- 7) Н.К. Крупская, Пед. соч., т. 1, с.251.
- 8) Там же.
- 9) Там же, с.252.
- 10) Там же.
- 11) レーニンによればプロレタリアートによる政治権力獲得のあとのプロレタリア革命の構成部分、きり離しがたい部分としての文化革命の理論、つまり先進資本主義諸国に比べて経済的文化的後進性による低い文化水準のレーニンの超克の方途についてつぎのようにのべている。「社会主義を建設するために、一定の文化水準（とはいえこの一定の「文化水準」がいったいどんなものであるかは、だれもいえない………）が必要ならば、なぜ、この一定の前提を革命的方法で獲得することからはじめ、そのあとで労農権力とソビエト制度をもとにして、他の国民に追いつくために前進してはいけなのだろうか。」（邦訳レーニン全集、第33巻、p.438）これはレーニンが日和見主義者の批判にこたえる中で明らかにしたものである。
- 12) クルブスカヤ・五十嵐頭他訳、前掲書、p.163.
- 13) Крупская, там же, т. 1, с.262.
- 14) Там же, с.264.

- 15) Там же, с.265.
- 16) Там же, с.427-429.
- 17) Там же, с.429.
- 18) 長江好道「校外教育の模索と創造」(梅根悟監修『世界教育史大系16——ロシア・ソビエト教育史Ⅱ』pp.158—179), 講談社, 1977年を参照のこと。
- 19) Коммунистическое воспитание, М., 1921, т. 2, с.71.
- 20) А. Давидюк и И. Данченко, Вступающему в комсомол, М., Мол. гвардия, 1976, с.77.
- 21) С.М. Левидов, С.А. Пабротскаヤ (海老原遙訳), グループスカヤ選集別巻 グループスカヤ—その生涯と思想, 明治図書, 1969年, p.125.
- 22) 1913年レーニンは、ツァーリの文部省をこのように評価している。
- 23) С.М. Левидов他 (海老原訳), 前掲書, p.125.
- 24) Крупская, там же, с.429.
- 25) Там же, т. 5., с.67-81.
- 26) Там же, с.68.
- 27) Там же.
- 28) Там же, с.69.
- 29) Там же.
- 30) Там же.
- 31) 大橋精夫・矢川徳光監修, 「レーニン教育論大系」, 明治図書, 1966年, p.424による。ただし, 邦訳, レーニン全集第31巻(大月書店)1964年, では「人類がつくりだしたすべての豊富な知識で, 記憶を豊かにする。」, 矢川徳光・松本滋, レーニン教育論(青木文庫)1965年, では「人類がつくりだしたすべての富に関する知識で, 自分の頭脳をやたかにする。」(傍点長江)である。
- 32) Крупская, там же, т. 5., с.69-81.
- 33) Там же, с.81.
- 34) Там же.
- 35) Там же, т. 5, с.622.
- 36) Там же.
- 37) Там же.
- 38) Там же, т. 5, с.25,
- 39) Там же.
- 40) Там же, т. 5, с.305.
- 41) Там же, т. 5, с.97.
- 42) 総合技術教育(Политехническое обучение)とは「生産の主要な諸部門および生産の科学的諸原理についての知識を与え, 生産労働に参加するために必要な, 技術一般の実際的技能を身につけさせる教育。総合技術教育は, 社会主義社会の全面的に発達した人間を育成する過程のもっとも重要な構成部分の一つである。」(ソビエト教育科学辞典, 明治図書, 1963年, pp.90—91) 総合技術教育の必要性を最初に提唱したのは, К. マルクスとF. エンゲルスであるが, かれらは, それを「あらゆる生産過程の基本原則を教え, 同時に, 子どもまたは少年をあらゆる生産のもっとも簡単な道具の使用法に習熟させる教育である。」(Маркс, К и Энгельс, Ф., Соч. т.13, ч. 1, с.199, 邦訳「選集」第11巻, p.160, 大月書店, 1954年)
- ロシア共産党(ボ)第8回大会(1919年)で採択された綱領には「17歳までのすべての男女児童に対する無償義務教育制の普通教育ならびに総合技術教育(生産のあらゆる重要部門のことを理論と実践とにおいて知らせる教育)」(КПСС в резолюциях —, изд., 7-е ч. 1, 1954, с.419.)。レーニンは, 覚え書『総合技術教育について』で, 学校は子どもや青年に広い一般教養と総合技術的視野を保障し, 若

- い世代に対して実践や社会主義建設と結びついた一般教養的知識を付与しなければならないとしている。
- 43) この部分は矢川徳光『ソビエト教育学の展開』（1953年），春秋社の第二章「ポリテフニズムの歴史と意義」p.75から重引。
- 44) Документы внешней политики СССР, т. 5, М., Госполитиздат, 1961, с.294.
- 45) 1920年ロシア・コムソモール第3回大会が開かれた年には、コムソモール数が48万2,342人になった。前年の1919年の9万6,000人に比べると約5倍に増加している。（コムソモールの発展状況については拙稿『世界教育史大系16』を参照のこと。）
- 46) グルズデフ編，『教育学』所収，1932, М., pp.96—97.（邦訳，矢川「ソビエト教育学の展開」p.87参照。）
- 47) 矢川徳光，前掲書，p.88.
- 48) И. А. Каиров и др., Педагогический словарь, изд. АПН РСФСР, М., 1960, с.583.
- 49) Крупская, там же, т. 4, с.194.
- 50) Там же, т. 2, с.139.
- 51) Там же.
- 52) И. А. Каиров, Педагогическая наука и проблемы пионерского движения, СП, 1963. 4, М., АПН РСФСР, с.16.